

# タミル語初等文法ノート

松 本 照 敬

まえがき 筆者は、1971-72年、1977-78年の2度にわたってオランダ・ライデン大学に留学した。1度目の指導教授ルエッグ先生は、筆者に「ラーマヌジャの研究を続けてゆくならタミル語を学んだ方がよい。よい先生を紹介する」とおっしゃって、ゴーヴィンダンクッティ講師を紹介して下さった。

インド人の同講師はライデン大学で学位を取得され、オランダに帰化して、現在は Gopi MENON と名乗っておられる。

10月に講座が開かれた時、聴講生は、筆者と女子大生2名の計3名であった。講師は、「タミル語はサンスクリット語のように文法が難しくないので、テキスト読解しながら必要に応じて説明する」とのことで、文字の修得を終えると、直ちに会話体のテキストを読み始めた。前期の授業はこのようにして3人が順にテキストを読み進め、講師がこれに解説を加えるという形で進行した。

後期に入ると、既婚者の女子学生が、ご主人が長期の外国出張になるというので付添いの為休学した。もう1名の女子学生は、他の課目の予習が忙しいとのことで受講をやめてしまった。

後期授業は、講師と筆者とのマンツーマンになった為、会話文のテキスト講読を終わりにし、やさしい選文集を読み進めた。選文集には、巻末に語彙が記されていたので、本格的に辞書を引くこともなく読解することができた。(「現代タミル文学作品2例」、『智山学報』第29巻、pp. 131～143) 選文集を読み進める合間に、タミル語の英文文法書を参照してノートを作成した。それがこのたび本紀要に掲載するノートである。

2度目の留学の折は、指導教授は T.E. フェッター先生となったが、同教授もタミル語の勉強は続けるようにと勧めて下さったので、再びゴーヴィンダンクッティ講師の指導を受けることになった。2度目のテキスト講読

は選文集ではなく、シヴァ教の古詩であった。この折の成果は、『成田山  
仏教研究所紀要』に掲載した。〔「タミル語古詩2篇」、第4号、1979、pp.  
285～330〕

今回掲載するノートは、拙いものではあるが、初めてタミル語に取組も  
うとする学生にとっては、何らかの役に立つであろうと考えた次第であ  
る。タミル語の専門家のご叱声をお願いしたい。

タミル文字という特殊な文字の印刷をお引き受け下さった(株)東京プ  
レスのみなさん、とりわけ、担当の橋本和加子さん、および校正等に助力  
して下さいました伊藤照鏡助手に篤く感謝の意を表したい。

——— × ——— × ——— × ——— × ——— × ———



b). タミル語最古の文献は、『トルカーツピヤム』という名のタミル語の文法書であり、紀元1世紀の成立と推定されている。

タミルの古典文学は、サンガム（またはシャンガム）文学と総称される詩篇である。

『Pattupāṭṭu』（十田園詩）と『Eṭṭuttokai』（八詞華集）とに分類されている。内容的には、Akam と Puram に二大別され、前者は主として恋愛をテーマにしており、後者の主要テーマは戦争である。

5世紀ころの成立と推定される『Tirukkuraḷ』は1330の箴言詩の集成として著名である。

後期サンガムの文学中に、初めての叙事詩『Cilappatikāram』がある。貞節な婦人カンナキの物語りである。この物語りの続きとして描かれた『Maṇimekalai』は、仏教教理を記述するタミル文献としても重要である。

600年から900年にかけては、バクティ文学の時代である。ヴィシュヌ教のアールワールたち、シヴァ教のナーヤナールたちが、神に対する愛（バクティ）の感情を熱烈に唱いあげたものである。

9世紀のマーニッカヴァーサハルによる『Tiruvācakam』は特によく知られた詩篇である。

900年から1200年にかけては、叙事詩の時代とよばれ、『Cīvakacintāmaṇi』『Cūḷamaṇi』や、『Periyapurāṇam』が作成された。また Kampan がサンスクリットの『ラーマヤナ』にもとづいて『Irāmāvataram』を作った。

1200年から1650年にかけては、文学が衰退して見るべきものが少いが、それ以降、西欧文学、キリスト教の影響を受け、独立のタミル文学が著されるようになっていく。

## II. タミル語文法 略抄

### 1. タミル語の文字と発音

#### 1) 文字

タミル語には、12の母音文字と18の子音文字がある。その他サン  
スクリット語から入った語の音を写すための5つの子音文字がある。

#### a) 母音文字

அ ஆ இ ஈ உ ஊ எ ஏ ஐ ஒ ஓ ஔ  
a ā i ī u ū e ē ai o ō au

〈注〉 ஐ は格語尾のときは、எ, ஏ のように発音される。

ஒ, ஓ は語頭では、wo, wō のように発音される。

#### b) 子音文字

破裂音 க ச ட த ப  
ka ca ṭa ta pa

鼻音 ங ஞ ண ந ட  
ṅ ṇ ṅa na ma

半母音 ய ர ல வ ழ ள ற ன  
ya ra la va ḷa ḷa || ra ṇa

〈注〉 子音のみを表すときは、文字の上に punni と呼ばれる <sup>•</sup> をつ  
ける。

(例) க், ச், ட், த், ப், etc.

#### c) 子音と母音の統合

子音文字の基体にさまざまな記号を付して、子音と母音を結合させ  
る。その仕方は、次のとおりである。

○ அ の表記. ……<sup>•</sup> のない子音文字には a 音が含まれている。

(例) க = ka      க் = k

- **ஆ** の表記. …… 2 通りの方法がある。
  - (1) 子音文字 + ஂ (例) க் + ஆ = கா (kā)
  - (2) ண், ற், ன் は ூ を加える。  
ண் + ஆ = ணூ, ற் + ஆ = றூ, ன் + ஆ = னூ
- **இ** と **ஈ** の表記. …… ீ および ெ を加える。  
(例) க் + இ = கி (ki), க் + ஈ = கீ (ki)
- **உ** と **ஊ** の表記. …… いく分複雑であり、次のように表される。
  - (1) ம் + உ = மு ; ம் + ஊ = மூ
  - (2) க், ச், ட் = கு, கூ ; க், த் ; டு, டூ :
  - (3) ங், ப், ய், வ் = ஙு, ஙூ ; பு, பூ ; யு, யூ ; வு, வூ :
  - (4) ஞ் = ஞு, ஞூ, ண் = ணு, ணூ, த் = து, தூ,  
ந் = னு, னூ, ல் = லு, லூ, ற் = று, றூ,  
ன் = னு, னூ
- **எ** と **ஏ** の表記.  
க் + எ = கெ ; க் + ஏ = கே
- **ஐ** の表記. …… 2 通りの方法がある。
  - (1) ண், ல், ள், ன் は ை を付す。ஐண, ஐல, ஐள, ஐன
  - (2) 上記以外の文字は ௐ を付す。  
(例) கை, பை, ரை, மை etc.
- **ஔ** と **ஔ** の表記.  
ஔ は ஆ + ெ の形となる。(例) கொ, லெண  
ஔ は ஆ + ை の形となる。(例) கோ, லேண
- **ஔள** の表記.  
ௌ と ள を付す。(例) கௌ (kau), வெள (vau)  
\* ஔள (au) の代わりにしばしば அவு が使われる。

(例) ரௌக்கை (raukkai) → ரவுக்கை (ravukkai)

இரவிக்கை = 女性用の短いジャケット (テルグ語より)

〈注〉கௌは文字の上では kau とも kela とも読めるわけであるが、  
 ெ(e) を含む音節に ள(la) が続くタミル語の単語が存在しない  
 ので、混同されない。

d) 子音文字の発音

子音文字は単一音で発音されないものが多いので注意が必要である。次に個々の子音文字の発音の特徴について見てゆこう。

க 1) k と発音される場合

- |               |                  |
|---------------|------------------|
| a. 語頭         | கதை (物語)         |
| b. 音節の終わり     | பக்தி (bhakti)   |
| c. க்க とダブるとき | பக்கம் (側)       |
| d. ி のあと      | வெட்கம் (恥)      |
| e. ற் のあと     | காவற்காரம் (見張り) |

2) 単一で母音にはさまれると、k 音がゆるむ。

பகை (敵)

3) 特に数音節より成る語で最終音節で h となる。

அவர்கள் (彼等)

4) ங், ண், ன் のあとでは g となる。

நாங்கள் (我々)

5) サンスクリット起源の語は、しばしばもとの音で発音される。

(k, kh, g, gh, h)

நாகம் (nāgam) へび      குரு (guru) 先生

ங் …語頭に立たない。

- சு 1) s と発音される。 சரி (正しい) பசி (飢)
- 2) ச், ட், ற் のあとでは ch となる。  
பச்சை (パッチャイ) 緑 முயற்சி (努力)
- 3) ஞ் のあとでは j となる。 ஊஞ்சல் (ウーンジャル) 羽
- 4) サンスクリット起源の語は、もとの音に従って発音される。  
தேசம் (deśam) 場所

ஞ = ña

ட (ta) 普通語頭に立たないが、ウルドゥー語起源の語には語頭に立つものがある。

டப்பி (小箱)

த (ta)

- |                            |                  |
|----------------------------|------------------|
| 1) 語頭で硬音。                  | தலை (頭)          |
| 2) ダブる場合も硬音。               | சத்தம் (音)       |
| 3) 母音の間では軟音。               | பதம் (語)         |
| 4) த் のあとでは d となる。         | இந்த (これ)        |
| 5) Skt. 起源の語は、時として dh となる。 | தர்மம் (dharmam) |
|                            | தனம் (dhanam)    |

ந (na) ந と ன には本質的には差はない。

- |                          |                   |
|--------------------------|-------------------|
| 1) ந 是語頭に立つ。             | நல்ல (よい)         |
| 2) ந 是 த の前にくる。          | சந்தனம் (旃檀)      |
| 3) ந் 是語末にはこない。          |                   |
| 4) ன 是語頭に立たない。           |                   |
| 5) ன்ற 是 ndr と発音される。     |                   |
| 6) ந் と ன் 是しばしば置きかえられる。 | ஓநாய் / ஓனாய் (狼) |

ப (pa)

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1) 語頭では硬音、P。 | படம் (布) |
|--------------|----------|

- 2) ダブる場合も同じ。 **தப்பு** (失敗)  
 3) 母音間ではやや軟音。 **தபசு** (苦行)  
 4) ட், ற், ற் のあとでは、p と b の中間音 **நட்பு** (友情)  
 5) ம் または ன் のあとでは b。 **தம்பி** (弟)

\* 他の言語を起源とする語は原音を保つ。 **பயம்** (bhayam おそれ)  
**பந்து** (bandhu 親族)  
**பாங்கி** (Eng. bank)

ம (ma)

ய (ya)

ர (ra)

- 1) ப், த், க், ச் の前で ற் は巻き舌になる。  
**சேர்ப்பேன்** (私はあつめるだろう。)  
 2) ற் はダブらない。  
 3) ற் と ற் は本質的には同音。ただし、**ற்ற** はやや巻き舌になる。  
**ற்ற** は t, d の音を表すことがある。  
 4) ற், ற் は同音であっても、表記されると別の語を示す。  
**எரி** (燃える) **எறி** (投げる)

ல (la)

வ (va)

ழ (la)

- 1) タミル語特有の音。r と l の中間のあいまい音。  
 2) ழ் はダブらない。語頭にも立たない。

ள (la) 反舌音

## ற (ra)

- 1) **க், ப்** の前で t 音となることがある。  
**கற்கள்** (右)
- 2) **ன்ற** は ndr (前出)
- 3) **ற்ற** は tr 音。 **எற்று** (投げる)
- 4) **ற்ற** は tt となることもある。 **எற்றம்** (上昇) = **எத்தம்**
- 5) **ற்** は語頭に立たず、**க்க், ச்ச், த்த், ப்ப்** の前は必ず **ர்** で示され **ற்** がくることがはない。

## ன (na)

- 1) 語頭に立たない。
- 2) **ந்** より強い音。
- 3) **ற்** の前では **ந்** とはならず **ன்** となる。

◦ **ஆய்தம்** 母音と強い子音の間に挿入される文字。(語形にあらわれる)

**இது** (これ) = **இஃது**

e) サンスクリット起源の語を写す文字 (5 種)

**ஷ** (śa) タミルでは **ட்** となる。 **நஷ்டம்** → **நட்டம்** (消滅)

**ஸ** (sa) **புஸ்தகம்** (本)

**ஜ** (ja) **ஜனம்** janam (人) **ஜுவம்** (生命)

u, ū は **ஜு**, **ஜூ** となる。

**க்ஷ** (kṣa) タミルでは **ட்ச** となる。 **மோக்ஷம்** → **மோட்சம்** (mokṣa)

**ஹ** (ha) タミルでは **க்** となる。 **அஹிம்ஸை** → **அகிமசை**  
(ahimsā 不殺生)

## 2. タミル語の連声法

タミル語の文章は、正式には、連書される。

**அவனிங்கேயில்லை.** (彼はここには居ない。)

しかし、今日では、分書するならわしとなっている。

**அவன் இங்கே யில்லை.**

語末の音と次語の頭音には、一定の法則に従って、変化、省略、付加が生ずる。

\* 次の規則中で言う、2 短音節語とは、1 短母音より成る 2 音節の語をいう。

(例) **இது., பசு** (牛) etc.

単純合成語を指すので、たとえば **அப்பம்** (パン) や **பஞ்சு** (綿) などは含まれない。

以下に連声の規則を述べるが、極めて重要なもののみに限ることとする。

### (A) 母音 連声

I. 母音 **உ** 終の全語 (ただし 2 短音節語を除く) は、母音を語頭とする語または接尾辞と結合するとき、**உ** が消失する。

**காது + இல் > காதில்** (耳の中で)

**விளக்கு + இல்லை > விளக்கில்லை** (ランプがない)

**அது காஇ அல்ல > அது கால்ல.**

II. **உ** 終の語で 2 短音節語は、上記の結合のとき **வ்** が挿入される。

**பசு + இல் > பசுவில்** 牛の中に

**நடு + இல் > நடுவில்** 中央に

〈注〉 **அது, இது, எது** はこの規則の例外。規則上に従う。

**அதில்**

III. **இ, ஈ, ஐ** 終の語は、母音始の語または、接尾辞と結合すると **ய்** が挿入される。

**நரி + இன் > நரியின்** (ジャッカルの)

**ஏ** 終の語は分書されるが母音と結合するとき **ய்** が挿入されることが多い。

**இரவிலே அரசன் வந்தான் > இரவினே ய்ரவிலே யரசன் வந்தான்.**

- IV. அ, ஆ, ஊ, எ, ஒ, ஓ, ஔ 終の語が母音始の語または接尾辞と結合すると **வ்** が挿入される。

ராஜா + இன் > ராஜா**வ்**இன் (王の)

(B) 子音終の語の連声

- V. 短母音をもつ 1 音節語が無声子音で終る場合、母音始の語または接尾辞と結合すると、その子音はダブる。

கல் + இல் > கல்**ல**ில் (右に)

(C) க், ச், த், ப் 的挿入

- VI. 母音終の語が、க், ச், த், ப் 始の語と結合すると、子音は一般にダブる。

அந்த புலி > அந்த**ப்** புலி (あの虎)

(D) 末尾音の規定

- VII. ல், ள், ண், ன் + க், ச், ப் >

- 1) 末尾 ல் → ற்

〈例〉காவல் + காரன் > காவ**ற்**காரன் (みはり)

- 2) 末尾 ள் → ட்

〈例〉நாள் + கள் > நா**ட்க**ள் (日々)

- 3) 末尾 ண் → 時々 ட்

〈例〉மண் + பாததிரம் > ம**ட்பா**த்திரம் (土瓶)

- 4) 末尾 ன் → しばしば ற்

〈例〉பொன் + சிலை > பொ**ற்**சிலை (黄金の像)

VIII. 末尾 ம் の規定

- 1) ம் + க > ங் + க்

ஜெயம் + கொண்டான் > ஜெய**ங்**கொண்டான்.

(彼は征服した。)

- 2) ம் + ச் > ஞ் + ச்  
 ஜெபம் + செய்தான் > ஜெபஞ்செய்தான்.  
 (彼は祈った。)
- 3) ம் + த் > ந் + த்  
 இரண்டாம் + தரம் > இரண்டாந்தரம்  
 (1 秒)
- 4) ம் + ம் > ம்  
 முதலாம் + மாதம் > முதலாமாதம்  
 (第 1 月)
- 〈注〉この規定は、しばしば無視される。

- (E) 指示小辞 (அ-, இ-, எ-) に関する規定  
 指示小辞+子音始の語>子音がダブる  
 அ + வீடு > அவ்வீடு その家  
 இ + நாள் > இந்நாள் この日  
 அ + கரை > அக்கரை あの岸  
 எ + போது > எப்போது いつ?

(F) その他の変化

他の多くの変化が、タミル詩中に見られ、また時として散文中にもあらわれるが、省略する。

また、サンスクリットの合成語が時々タミル語に導入されるが、その場合、サンスクリットの連声の規則が適用される。

次の例は、普通の例である。

- அ + அ or ஆ > ஆ    பஞ்ச + அங்கம் > பஞ்சாங்கம்  
 (カレンダー)
- அ + இ > ஏ    சுர + இந்திரன் > சுரேந்திரன் (インドラ神)
- அ + உ > ஓ    சூரிய + உதயம் > சூரியோதயம் (日の出)

## 3. 名詞・代名詞・形容詞

## I. 名詞 (பெயர்ச்சொல்)

[性] タミル語の名詞には、男性名詞 (m.) 女性名詞 (f.) 中性名詞 (n.) の別がある。

男性名詞の例 தேவன் (神)、தம்பி (弟)

女性名詞の例 தேவி (女神)、மனைவி (妻)

中性名詞の例 நாய் (犬)、மரம் (木)

[数] 名詞には単数 (sg.) 複数 (pl.) がある。

[格] 格は8格ある。格を列举し、用法を略述する。

(1) 主格 (Nominative, 略号 Nom.) 主語 (～は)

Nom. は6母音 (ஆ, இ, ஈ, உ, ஊ, ஐ) または  
8子音 (ண், ம், ய், ற், ல், ழ், ள், ன்) で終わる。

(2) 目的格 (Accusative, Acc.) 動詞の目的語 (～を)

(3) 具格 (Instrumental, Inst.) 用具、手段、同伴 (～により、～と共に)

(4) 与格 (Dative, Dat.) 間接目的語、方向 (～に、～へ)

(5) 従格 (Ablative, Abl.) 分離 (～より、～から)

(6) 属格 (Genitive, Gen.) 所有 (～の、～にとり)

(7) 依格 (Locative, Loc.) 位置 (～において)

(8) 呼格 (Vocative, Voc.) 呼びかけ (～よ)

[格語尾] 名詞の変化は、語幹 + 語尾の形で行われる。語幹は、名詞の原型を保つ原型語幹と変化語幹とがある。語幹と語尾が結合するとき、連声の規則が適用される。

格語尾の基本型は次のとおりである。

Nom. \_\_\_\_\_

Acc. ஐ

Inst.	(1) ஆல் (~によって)
	(2) ஒடு (~とともに)
Dat.	(1) க்கு, உக்கு (~に)
	(2) க்காக, உகாக (~のために)
Abl.	இல், இலிருந்து, இனின்று
Gen.	இன், உடைய, இனுடைய, இனது
Loc.	இல், இடத்தில்
Voc.	ஏ, ஆ

〈注〉1) Dat. の **க்கு** は **இ**, **ஈ**, **ஐ** 終の語幹につき、**உக்கு** はそれ以外の語幹につく。

2) Abl. には **இருந்து**、**இடத்திலிருந்து** という形もある。**இலிருந்து** はふつう中性名詞につき、**இடத்திலிருந்து** は、常に人か、生物を示す語につく。

3) Loc. の **இல்** は中性名詞につき、**இடத்தில்** は人称名詞につく。文章語では、変化語幹が Loc. として用いられることもある。

4) Voc. は Nom. + **ஏ** の形をとるが、**ன்** 終の人称・名詞の場合は、しばしば **ன்** をおとして、先行母音を強める。

**மகன் + ஏ > மகனே** (息子よ！)

**அண்ணன் > அண்ணே** (兄よ！)

また **இ** 終の人称名詞には **இ** を保存するときと **இ** を延長するときとがある。

**தம்பி** (弟よ！)、**தம்பீ** (弟よ！)

[複数形の格変化] 名詞の複数は単数に **கள்** を加えて作られる。

格変化は、複数形を単数と同様に变化させる。

〈注〉 **ன்** 終の男性名詞は **ன்** を **ர்** にかえて **கள்** を加え複数形を作る。

[格変化の例] **வண்ணன்** (洗濯屋)、**மரம்** (木)

Nom.	<b>வண்ணன்</b>	<b>மரம்</b>
Acc.	<b>வண்ணனை</b>	<b>மரத்தை</b>
Inst.	<b>வண்ணல்</b> <b>வண்ணனோடு</b>	<b>மரத்தால்</b> <b>மரத்தோடு</b>
Dat.	<b>வண்ணனுக்கு</b> <b>வண்ணனுக்காக</b>	<b>மரத்துக்</b> <b>மரத்துக்காக</b>
Abl.	<b>வண்ணனில்</b> <b>வண்ணனிலிருந்து</b> <b>வண்ணனினின்று</b>	<b>மரத்தில்</b> <b>மரத்திலிருந்து</b> <b>மரத்தினின்று</b>
Gen.	<b>வண்ணனின்</b> <b>வண்ணனுடைய</b> <b>வண்ணனினுடைய</b> <b>வண்ணனது</b>	<b>மரத்தின்</b> <b>மரத்தினுடைய</b> <b>மரத்தினது</b>
Loc.	<b>வண்ணனில்</b> <b>வண்ணனிடத்தில்</b>	<b>மரத்தில்</b> <b>மரத்தினிடத்தில்</b>
Voc.	<b>வண்ணனே</b> <b>வண்ண</b>	<b>மரமே</b>

[名詞変化の4分類] 名詞の語尾変化は、次の4種に分類される。

- I. **ன்** 終の男性名詞
- II. **ம்** 終の全名詞
- III. **டு, று** 終の名詞 (**நடு, மறு** のとき 2 音節名詞を除く)
- IV. 上記以外の全名詞

(1) 第 I 種変化

- 1) 変化語幹は、単数は Nom. と同じ。
- 2) 複数の Nom. は **ன்** を **ர்** にかえる。 **மனிதன்** → **மனிதர்**  
ふつうの用法では **கள்** を付す。 **மனிதர்கள்**

\* 例外、**பையன்** (少年) は複数 **பையன்கள்** (**பையர்கள்** ではない)。

**மகன்** (息子) は、複数 **மக்கள்** (**மகர்கள்** ではない)。

**மகன்கள்** が用いられることもある。

息子の複数は、一般に、**குமாரர்** または **குமாரர்கள்**。

3) Voc. は Nom. + **ஏ**, **-அன்** で終る名詞は、**ன்** をおとして **அ** を延長、**-ஆன்** ならば、**ன்** をおとす。

(例) **மனிதனே**, **சீஷன்** (弟子) → **சீஷா**,  
**உண்ணான்** (洗濯屋) → **உண்ணா**

(2) 第Ⅱ種変化

1) 変化語幹は **ம்** を **க்கு** に変える。 **படம்** (絵) → **படத்து**

2) 複数は Nom. + **கள்** **படங்கள்**

3) 変化語幹もしばしば所存を示す。

**கொட்டத்து வழி** (庭の道)

(3) 第Ⅲ種変化

1) 単数変化語幹は、終音の子音をダブらせる。

**வீடு** (家) → **வீட்டு**

**ஆறு** (川) → **ஆற்று**

**வயிறு** (胃) → **வயிற்று**

2) 複数は、Nom. + **கள்**

(4) 第Ⅳ種変化…… I ~ III に含まれない全名詞。大多数は中性、若干の男性名詞 (**பிதா** 父、**குரு** 師)、若干の女性名詞 (**மகள்** 娘、**ஸ்திரீ** 婦人、**பெண்** 女性)。

1) 変化語幹は Nom. と同じ。

2) 複数は、Nom. sg. + **கள்**

**மீன்கள்** 魚たち

\* 複数形の例外

長母音終の名詞、2 単音節より成る名詞は、**-க்கள்** を付す。

ஈ (はえ) → ஈக்கள்

குரு (師) → குருக்கள்

உ 終の若干の名詞も同様である。

சத்துரு (敵) → சத்துருக்கள்

また、規則Ⅶに従って変化するものもある。

கல் 石 → கற்கள் または கல்லுகள்

நாள் 日 → நாட்கள்

மகள் 娘 → மகட்கள் (あまり使われない)

\* 第Ⅳ種変化の若干の名詞は Dat. の **ககு** の前で **உ** を **ஐ** にかえることができる。

நாள் 日     Dat. நாளுக்கு, நாளைக்கு 明日

[複合名詞]

名詞と名詞が合して、複合名詞となる。結合に際して連声規則が適用される。前分は変化語幹となり、後分を修飾する。

தலைநோவு 頭痛

பக்கதது வீடு 隣りの家     பக்கம் 隣接

1) 名詞の变化語幹 + **காரன்** (m.) または **காரி** (f.) > 名詞の行為者。

வேலை -க்- காரன் 労働者

வேலை -க்- காரி 労働する婦人

2) **ஆன்** (m. sg.)、**ஆள்** (f. sg.)、**ஆர் ஆர்கள்** (pl.) は变化語幹について人称名詞を作る。

ஊர் 村 — ஊரான் 村人

சத்தியம் 真実 — சத்தியவான் 誠実な人

II. 代名詞 (பிரதிப் பெயர்)

[人称代名詞]

(1) 1 人称・代名詞の格変化

	sg.	pl.	
Nom.	நான்	நாம்	நாங்கள்
Acc.	என்னை	நம்மை	எங்களை
Inst.	என்னால் என்றோடு	நம்மால் நம்மோடு	எங்களால் எங்களோடு
Dat.	எனக்கு எனக்காக	நமக்கு நமக்காக	எங்களுக்கு எங்களுக்காக
Abl.	என்னில் என்னிலிருந்து	நம்மில் நம்மிலிருந்து	எங்களில் எங்களிலிருந்து
Gen.	என் எனது என்னுடைய	நம் நமது நம்முடைய	எங்கள் எங்களது எங்களுடைய
Loc.	என்னில் என்னிடத்தில்	நம்மில் நம்மிடத்தில்	எங்களில் எங்களிடத்தில்

\* 1 人称複数のうち、**நாம்** は“包含のわれわれ”であり、  
**நாங்கள்** は“除外のわれわれ”である。

すなわち、**நாம்** は、話し相手を含む“われわれ”であり、  
**நாங்கள்** は含まない“われわれ”である。

祈りの時には、**நாங்கள்** しか用いることができない。

“**நாங்கள் தீமை செய்தவர்கள்**”

[私たちは悪業者でございます]。

もしも **நாம்** が用いられると、“罪人たるわれわれ”の中に、話し相手である神をも含むことになってしまう。

\* **நான்** (1. sg.) の代りに、王などが **நாம்** (1. pl.) を用いることがある。

## (2) 2 人称代名詞の格変化

	sg.		pl.
Nom.	நீ	நீர்	நீங்கள்
Acc.	உன்னை	உம்மை	உங்களை
Inst.	உன்னால்	உம்மால்	உங்களால்
	உன்னோடு	உம்மோடு	உங்களோடு
Dat.	உனக்கு	உமக்கு	உங்களுக்கு
	உனக்காக	உமக்காக	உங்களுக்காக
abl.	உன்னில்	உம்மில்	உங்களில்
	உன்னிலிருந்து	உம்மிலிருந்து	உங்களிலிருந்து
Gen.	உன்	உம்	உங்கள்
	உனது	உமது	உங்களது
	உன்னுடைய	உம்முடைய	உங்களுடைய
Loc.	உன்னில்	உம்மில்	உங்களில்
	உன்னிடத்தில்	உம்மிடத்தில்	உங்களிடத்தில்

〈注〉 \* நீ (2 人称 sg.) は、召使いや小さな子供への呼びかけとして用いられる。宗教詩の中で神への呼びかけとして用いられることもまれにある。

\* நீர் は複数だが、単数のていねい語として用いられる。キリスト教では神への呼びかけとして用いる。

\* நீங்கள் は、2 重複数である。常にていねい語として用いられる。

## (3) 3 人称代名詞の格変化

(sg.)	m.		f.		n.
Nom.	அவன்		அவள்		அது
Acc.	அவனை		அவளை		அதை
Inst.	அவனால்		அவளால்		அதால்

	அவனோடு	அவளோடு	அதனால் அதினால் அதோடு அதினோடு
Dat.	அவனுக்கு அவனுக்காச	அவளுக்கு அவளுக்காச	அதிற்கு அதற்கு
Abl.	அவனில் அவனித்திலிருந்து	அவளில் அவனிடத்தில்	அதில் அதின்
Gen.	அவன் அவனது அவனுடைய	அவன் அவளது அவளுடைய	அதின் அதினது அதினது அதினுடைய அதனுடைய
Loc.	அவனில் அவனிடத்தில்	அவளில் அவனிடத்தில்	அதில் அதினிடத்தில் அதனிடத்தில்

(pl.)	m.f.		n.
Nom.	அவர் அவர்கள்	அவைகள்	அவை
Acc.	அவரை அவர்களை	அவைகளை	அவற்றை
Inst.	அவரால் அவர்களால் அவர்களோடு	அவைகளால் அவைகளோடு	அவற்றால் அவற்றினால் அவற்றினோடு
Dat.	அவருக்கு அவருக்காக	அவைகளுக்கு அவைகளுக்காக	அவற்றிற்கு
abl.	அவரில் அவரிலிருந்து	அவைகளில் அவைகளிலிருந்து	அவற்றில் அவற்றிலிருந்து
Gen.	அவர் அவரது அவருடைய	அவர்கள் அவர்களது அவர்களுடைய	அவற்றின் அவற்றினுடைய
Loc.	அவரில் அவரிடத்தில்:	அவர்களிடத்தில்	அவற்றில்

- 〈注〉 \* 複数 **அவர்** は3人称単数の尊敬語として用いられる。  
 \* 複数 **அவர்கள்** は、3人称単数の **அவர்** 以上の尊敬語として用いられる。  
 \* 代名詞の Gen. として変化語幹が用いられる。( **அது** を除く )  
 (例) 1人称単数 **என்**  
 2人称単数 **உன்**  
 3人称単数 **அவன்** など。  
**என்னுடைய** のように **உடைய** が加えられることもある。  
 \* 3人称中性の複数として、上記のように **அவைகள்** の代わりに **அவை** が用いられることがある。

[疑問代名詞]

- (1) 指示小辞を **எ** に代えると疑問代名詞となる。

<b>அவன்</b> (彼)	→	<b>எவன்</b> (どの男?)
<b>அவள்</b> (彼女)	→	<b>எவள்</b> (どの女?)
<b>அது</b> (それ)	→	<b>எது</b> (どれ?)
<b>அவர்கள்</b> (彼ら)	→	<b>எவர்கள்</b> (どの人たち?)
<b>அவைகள்</b> (それら)	→	<b>எவைகள்</b> (どのものども?)

- (2) **ஆர்** と **யார்** (誰?) が、男性・女性の単数複数に通じて用いられる。

Nom. <b>யார்</b>	Inst. <b>யாரால்</b>	abl. <b>யாரிலிருந்து</b>	Loc. <b>யாரிடத்தில்</b>
Acc. <b>யாரை</b>	Dat. <b>யாருக்கு</b>	Gen. <b>யாருடைய</b>	

- (3) **என்ன** は、何? どれ? どの? を意味する。

〈例文〉 **தச்சன் என்ன செய்தான்?** (大工は何を作ったのか?)

Inst. **என்னத்தினால்** 何によって?

Dat. { **என்னத்துக்கு**  
**என்னத்திற்கு** 何のために?

- (4) **எது** は [2つ以上のものうち] “どれ?” を意味し、**அது** と同様に變化する。

## இரண்டில் எது முக்கியம்?

(2つのうち、どちらが大切か?)

### [再帰代名詞]

再帰代名詞 **தான்** は動詞の主語に言及し、彼自身、それ自体などを表す。1人称代名詞 **நான்** と同様に变化する。(従って pl. は2種ある。)

〈注〉別語として不変化辞 **தான்** がある。これが付加されると語が強められ、「まさに」「実に」などを意味する。

**அது மெய்தான்.** (それは真実に他ならぬ。)

### [形容代名詞]

形容代名詞には、指示と疑問の2種がある。格変化はしない。

(1) 指示形容代名詞 **அந்த** (あれ) sg. pl.

**இந்த** (これ) sg. pl.

(2) 疑問形容代名詞 **எந்த** (どれ) sg. pl.

\* **அந்த, இந்த, எந்த** の代わりに **அ-, இ-, எ-** が指示小辞として語頭に加えられる。

**அ-, இ-, எ + 母音 > அ-, இ-, எ + வ் (ダブる) + 母音**

〃 + 子音 > 〃 + 子音 (ダブる)

(例) **அக்காலம்** その時

**அவ்விலைகள்** それらの葉 (葉 **இலை**)

**இவ்வூரிலே** この村で (村で **ஊரிலே**)

\* 指示小辞のついた次の語は、“~のような” という意を表す。

**அப்படிப்பட்ட** (そのような)

**இப்படிப்பட்ட** (このような)

**எப்படிப்பட்ட** (どのよう)

これらに3人称の人称語尾を加えると、名詞となる。

**அப்படிப்பட்டவன்** (そのような男)

**அட்டடிப்பட்டது** (そのような物)

また、‘このような’意をもつ**இன்ன**という語がある。

**இன்ன குதிரைகளுக்கு** (このような馬どもに)

この語も人称語尾を加えると名詞となる。

**இன்னான்** このような男

**இன்றாள்** このような女

**இன்னது** このようなもの

[疑問詞の全称辞化]

疑問詞に**உம்**を加えると普遍を表す。

**எங்கு** (どこ)

**எங்கும்** (どこでも)

**எப்போது** (いつ)

**எப்போதும்** (いつでも)

**யார்** (だれ)

**யாரும்** (だれでも)

**எவர்கள்** (どの人びと)

**எவர்களும்** (または **யாவரும்**)

(どの人びとでも)

**எவை** または **எவைகள்** (どのものども)

**எவையும்** (**யாவரையும்**)

**எவைகளும்** (あらゆるものども)

これらの語は否定の動詞と合して、“どこにも～ない、決して～ない、だれも～ない”などの意味となる。

**அவன் எப்போதும் வருகிறதில்லை.**

(彼は決してこない)

\* **உம்** のつく語が変化するとき**உம்**が最後にくる。

**யாவரும்** → Dat. **யாவருக்கும்**.



- 3) ஆனまたは உள்ள を加えることにより、多くの名詞が形容詞となる。これらの接尾辞は所有を示す。(後出する関係分詞である。)

சந்தோஷம் 喜び

சந்தோஷமுள்ள மனிதன் 喜んでいる男

அழகு 美しさ

அழகான ஸ்திரீ 美しい婦人

\* これら形容詞化した語に人称語尾を加えると人称代名詞となる。

அழகானது 美しい物 (動物)

- 4) 名詞から形容詞への変化

- a) -ம்பு 終の名詞は -ப்பு に変わって形容詞となる。

இரும்பு 鉄 இருப்புக்கோல் 鉄の棒

- b) ந்து 終の名詞は த்து に変わって形容詞となることがある。

மருந்து 薬 மருந்துப்பை 薬袋

- c) து 終の名詞は த்து に変わって形容詞となることがある。

எருது 仔牛 எருத்துப் பாரம் 仔牛の道

- d) 性質を示し உமை で終わる若干の名詞は இய に変わって形容詞となる。

பெருமை 偉大 பெரிய 偉大な

புதுமை 新しさ புதிய 新しい

- 5) タミル語の形容詞には、比較級や最上級の形はない。

4. 数詞、後置詞、接続詞、副詞、間投詞

I. 数詞

1) 基数

1 ஒன்று	11 பதினொன்று	21 இருபத்தொன்பது
2 இரண்டு	12 பன்னிரண்டு	22 இருபத்திரண்டு
3 மூன்று	13 பதின்மூன்று	23 இருபத்திமூன்று
4 நாலு, நான்கு	14 பதினாலு, பதினான்கு	25 இருபத்தைந்து
5 ஐந்து	15 பதினைந்து	29 இருபத்தொன்பது
6 ஆறு	16 பதினாறு	30 முப்பது
7 ஏழு	17 பதினேழு	31 முப்பத்தொன்று
8 எட்டு	18 பதினெட்டு	
9 ஒன்பது	19 பதின்மூன்று	
10 பத்து	20 இருபது	
40 நாற்பது	101 நூற்றொன்று	
50 ஐம்பது	102 நூற்றிரண்டு	
60 அறுபது	200 இருநூறு	
70 எழுபது	300 முந்நூறு	
80 எண்பது		
90 தொண்ணூறு	1000 ஆயிரம்	
100 நூறு		

\* タミル文字による数詞の表記

1 க	6 கூ	今日ではアラビア数字による 表記がふつうになっている。
2 உ	7 எ	
3 ந	8 அ	
4 ச	9 கூ	
5 ரு	10 ஓ	

- 2) ஒன்று 以外の基数は形容詞として用いられる。形容詞としての数詞は修飾する名詞に先行し、格変化はしない。

ஒன்று の形容詞形は ஒரு または ஒர் である。

- \* 抽象的な数を示す名詞として用いられるとき基数は第4種変化の名詞のように変化する。

ஐந்தில் இரண்டைக் கொடு. (5のうち2を与えよ。)

- 3) 2～8には通常の形のほか、特殊な形容詞形がある。

2. இரண்டு — இரு, ஈர்      6. ஆறு — அறு

3. மூன்று — மூ, மு      7. ஏழு — எழு

4. நாலு — நால்      8. எட்டு — எண்

5. ஐந்து — ஐம்

- 4) 数によって限定される名詞が男女の性をもつとき、பேர் (または பெயர் 人) が、しばしば挿入される。

நாலு பேர் சகோதாரர்கள் 4人の兄弟

- 5) 数詞形容詞に人称語尾のつく形がある。

ஒருவன் 1人の男      மூவர் 3人の人

- 6) [配分詞] 配分詞は次のような形をとる。

ஒவ்வொன்று 1つずつ      இவ்விரண்டு 2つずつ

மும்மூன்று 3つずつ ……

- 7) [序数] 序数は、基数 + ஆம் (形容詞)、または基数 + ஆவது (形容詞または副詞) の形をとる。格変化はない。

முதலாம் (第1の、例外の形)

முதலாவது (第1の、第1に)

இரண்டாம் (第2の)

இரண்டாவது (第2の、第2に)

II. 後置詞

1) Nom. につくもの

- a) மட்டும், மட்டுக்கும் ~まで (主として場所に言及)
- b) வரையில், வரையிலும், வரைக்கும், பரியந்தம்  
~まで (時間と場所の双方に言及)
- c) முதல், முதலாக, முதற்கொண்டு ~から

2) Acc. につくもの

- a) குறித்து ~について
- b) போல், போல, போலே ~のような
- c) தவிர, ஒழிய ~以外
- d) துழு, துழந்து, துழந்துகொண்டு ~のまわりに
- e) கொண்டு ~によって

3) Dat. につくもの

- a) ஆக ~に、~のために
- b) உள், உள்ளே ~の中に
- c) அப்புறம், அப்பால் むこう側で
- d) அப்புறம், இப்பால் こちら側で

4) ஁つう Dat. につくもの

- a) முன் ~の前に முன்னே, முன்னாலே, முன்பு,  
முன்னம், முன்னமே
- b) பின் ~の後に பின்னே, பின்னாலே, பின்பு,  
பிறகு, பிற்பாடு
- c) கீழ், கீழே ~の下に
- d) மேல், மேலே வீட்டுக்கு மேலே  
家の上方に (接触せずに)  
வீட்டு மேலே  
変化語幹につくと (接触して) 上に 家の上に (接触して)

## III. 接属詞

1) **உம்** は、次のような形で接属詞として機能する。

\* வீட்டையும் தோட்டதையும் குதிரைகளையும்

Acc. + um

Acc. + um

Acc. pl. + um

கொடுத்தான்.

\* வீடு தோட்டங் குதிரைகளையும் கொடுத்தான்.

Nom.

Nom.

Acc. pl. + um

(彼は、家と庭と馬たちとを与えた。)

\* அவனைப் பார்க்கவும், அவன் சொன்னதைக்

Acc.

Gen.

கேட்கவும் மாட்டேன்.

(彼を見ることも、彼の言葉を聞くことも、私は望まない。)

〈注〉 **உம்** は数とともに用いられると‘全部’の意味となる。

பத்துப் பேர் வந்தார்கள் 10 人の人が来た。

பத்துப் பேரும் வந்தார்கள் 10 人とも来た。

・単一の語につくと、その語を強める。

・動分詞につくと、譲歩の意味を表す。

・Voc. 関係分詞、定動詞にはつかない。

2) **ஆவது** は、名詞について、“～か、～か”の意味を表す。

நீயாவது நானாவது (君か私か)

3) **அல்லது** または

4) **ஆனால், ஆதில்** もしも、しかし

5) **ஆனாலும், ஆயினும், ஆகிலும்.** ～にもかかわらず

6) **ஆகையால், ஆதலால்** それゆえに

IV. 副詞

1) 副詞として用いられる語

- a. 以後      இனி, இனிமேல்
- b. まだ      இன்னம், இன்னும்
- c. 以前に    முன்னே, முன்பு
- d. のちに    பின், பின்பு, பின்னர்

2) 名詞に ஆய், ஆக を加えて副詞が作られる。

சந்தோஷம்    よろこび、சந்தோஷமாய் }    よろこんで  
 சந்தோஷமாக }

3) 不定詞が副詞として用いられる例

மிக    たくさん    கூட, ஒருமிக்க    一緒に  
 வலிய    自由に

4) ஏன் は“なぜ?” という意で用いられる。

அவன்    பணம்    ஏன்    கொண்டு வந்தான்?  
 彼は    金を    なぜ    もって    きたのか?

V. 間投詞

タミル語では、間投詞はひんばんに用いられる。

- 1) 呼びかけ：அடா, அடே, அடீ, அடியே, ஓய்
- 2) 答え：ஆம், ஆம்ஆம், இல்லை, இல்லைஇல்லை
- 3) 喜びの表現：ஓகோ, அட்டா, அடெடே
- 4) 悲しみの表現：அப்பா, அம்மா, ஐயோ, ஐயையோ
- 5) 驚きの表現：ஓகோ, ஆகா, அம்மம்மா
- 6) 軋蔑の表現：சீ, சீச்சீ

## 5. 動詞

タミル語の動詞は、肯定形と否定形に大別される。

## I. 肯定形の動詞

## 〔1〕 命令法

- 1) 単数の命令形は語根と同形である。子供や目下の者に対してのみ用いられる。

〈例〉 படி 読め    பண்ணு なせ    பார் 見よ  
〔主語は நீ である。〕

- 2) ていねいな命令形は、語根 + உம் の形である。

〈例〉 படியும், பண்ணும், பாரும்  
〔主語は நீர்、従って形式上は pl. であるが sg. に使われる。〕

- 3) 複数の命令形 語根 + உங்கள் 〔主語 நீங்கள்〕

〈例〉 படியங்கள், பண்ணுங்கள், பாருங்கள்

\* ていねいな命令形として、単数にも用いられる。語根 + உம் よりも格式ばっている。ただし、近代の用法では、子供や召使いに対する以外には、一般的に使用される。

\* 次の動詞は、不規則な形の命令形となる。

語根	sg.	pl.
வரு (くる)	வா	வாரும், வாருங்கள்
தரு (与える)	தா	தாரும், தாருங்கள்
போ (行く)	போ	போம், போங்கள்

## 〔2〕 三時制

- 1) 時制の表現……時制は、語根 + 媒辞 + 人称語尾によって作られる。

- a) 媒辞が時を表す。

現在を表す媒辞		கிறு, க்கிறு
過去	஁	ந்து, இறு, த்து
未来	஁	வு, ப்பு

- 〈注〉 \* 若干の動詞は過去で **து** をとる。 **செய்** (なす)  
**செய்தேன்** (私はなした。)
- \* 若干の動詞は語根の最終子音がダブる。  
**விடு** (はなれる) **விட்டேன்** (私は去った。)
- \* **கிறு**, **க்கிறு** の代わりに、**கின்று** が使われることがある。  
**படிக்கிறேன்** 私は読む。  
**படிக்கின்றேன்**

b) 人称語尾

sg.	pl.
1 人称 <b>ஏன்</b>	<b>ஓம்</b>
2 人称 <b>ஆய்</b>	<b>ஈர், ஈர்கள்</b>
3 人称 { <b>ஆன்</b> (m.) <b>ஆள்</b> (f.) <b>ஆது</b> (n.)	} <b>ஆர், ஆர்கள்</b>
	<b>அன</b>

- \* **ஈர்**, **ஆர்** は、**நீர்**, **அவர்** に各々対応する。複数だが単数のていねい語として用いられる。**ஈர்கள்**, **ஆர்கள்** も同様である。
- \* 媒辞の最終音は、人称語尾の頭初の母音に置きかえられる。  
**அடை + கிறு + ஏன்** > **அடைகிறேன்** 私は得る。  
**அடை + ந்து + ஏன்** > **அடைந்தேன்** 私は得た。  
**அடை + வு + ஏன்** > **அடைவேன்** 私は得るであろう。

c) 動詞変化の例 **அடை**

	sg.	
現在 (pres.)	過去 (past.)	未来 (fut.)
1. <b>அடைகிறேன்</b>	<b>அடைந்தேன்</b>	<b>அடைவேன்</b>
2. <b>அடைகிறாய்</b>	<b>அடைந்தாய்</b>	<b>அடைவாய்</b>
3. m: <b>அடைகிறான்</b>	<b>அடைந்தான்</b>	<b>அடைவான்</b>
f. <b>அடைகிறாள்</b>	<b>அடைந்தாள்</b>	<b>அடைவாள்</b>
n. <b>அடைகிறது</b>	<b>அடைந்தது</b>	<b>அடையும்</b>

	pl.		
	現在 (pres.)	過去 (past.)	未来 (fut.)
1.	அடைகிறோம்	அடைந்தோம்	அடைவோம்
2.	அடைகிறீர் ...கிறீர்கள்	அடைந்தீர் ...ந்தீர்கள்	அவைர் ...வீர்கள்
3.	அடைகிறார் ...கிறார்கள்	அடைந்தார் ...ந்தார்கள்	அடைவார் ...வார்கள்
	அடைகின்றன	அடைந்தன	அடையும்

〈注〉 \* 3. n. pres. pl. において றன の前に必ず **ன்** が挿入される。

\* 3. n. fut. については単複同型。

\* 過去の媒辞が **இனு** をとる動詞は 3. n. で最後の **னது** を **யது** または **ற்று** に変えることができる。 **தூங்கினது = தூங்கியது = தூங்கிற்று**.

### [3] 動詞の分類

タミルの動詞は、弱・中・強の3語幹動詞に分類される。

	現在形	未来形	過去形
(1) 弱語幹動詞 ……	கிறேன்	வேன்	4 変化
(2) 中語幹動詞 ……	கிறேன்	பேன்	1 変化
(3) 強語幹動詞 ……	க்கிறேன்	ப்பேன்	2 変化

#### ○ 弱語幹動詞の例

	現在	過去	未来
1) செய் (なす)	செய்கிறேன்	செய்தேன்	செய்வேன்
2) அறி (知る)	அறிகிறேன்	அறிந்தேன்	அறிவேன்
3) வாங்கு (得る)	வாங்குகிறேன்	வாங்கினேன்	வாங்குவேன்
4) விடு (去る)	விடுகிறேன்	விட்டேன்	விடுவேன்

#### ○ 中語幹動詞の例

5) உண் (食べる)	உண்கிறேன்	உண்டேன்	உண்பேன்
--------------	-----------	---------	---------

○強語幹動詞の例

6) படி (読む)	படிக்கிறேன்	படித்தேன்	படிப்பேன்
7) நட (歩く)	நடக்கிறேன்	நடந்தேன்	நடப்பேன்

[4] 自動詞と他動詞

多くの動詞語根から、自動詞と他動詞が作られる。自動詞は主語の経験や対象に及ばぬ行為を、他動詞は対象に及ぶ行為を表す。

1 語根から自・他の動詞が作られる場合、前者は弱語幹変化の1つに従うことが多い。(未来は **வேன்**)、後者は強変化で(未来 **ப்பேன்**) ふうは第6変化である。

〈例〉 அழி (滅する 3. decay, perish)

	現在	過去	未来	不定詞
自	அழிகிறேன்,	அழிந்தேன்,	அழிவேன்,	அழிய (亡びる)
他	அழிக்கிறேன்,	அழித்தேன்,	அழிப்பேன்,	அழிக்க (亡ぼす)

[5] 不定詞

不定詞は、目的を表現する。

現在形が **கிறேன்** となる動詞は、語根 + **அ** (連声の法則が働く)  
 “ **க்கிறேன்** “ 語根 + **க்க**

(例)

அடை (得る)	அடைய
படு (経験する)	பட
கொள் (取る)	கொள்ள
படி (学ぶ)	படிக்க
நட (歩く)	நடக்க

(例文)

அதைப் பார்க்க வந்தார்கள்.

(それを見るために彼らは来た。)

(慣用的表現) ~の時

- 1) இப்படி இருக்க, ஒருநாள் ஒரு வேடன் வந்தான்.  
(このように あったとき、ある日 1人の 獵師が やってきた。)
- 2) ていねいな命令、願望  
நீர் சொல்ல. (どうぞ言ってください。)

[6] 動分詞 (Verbal Participles)

動分詞は、タミルの文章の中で多用され、日本語の「…して」という語法に相当する。

- 1) 動分詞は、過去形第1人称の **ன்** を落とし、**ஏ** を **உ** に変えて作る。

அடைந்தேன் (私は得た)	→	அடைந்து (得て)
படித்தேன்	→	படிந்து (学んで)
என்றேன்	→	என்று (言って)
கொண்டேன்	→	கொண்டு (取って)

- 2) 弱変化第3型動詞の語根は、上の規則の例外となる。

(உ 終動詞、過去形は இனேன்)

この場合は、単に最後の **னேன்** を去って作る。

அடங்கினேன்	→	அடங்கி (提出して)
எழுதினேன்	→	எழுதி (書いて)
கட்டினேன்	→	கட்டி (疲れて)

次の動詞にも注意が必要である。

சொன்னேன் (語根 சொல் 言う)	→	சொல்லி (言って)
போனேன் (または போயினேன்) (語根 போ 行く)	→	போய் (行って)
ஆனேன் (または ஆயினேன்) (語根 ஆ ある、なる)	→	ஆய் または ஆகி

3) 動分詞の例文

நடந்து வந்தேன் 私は歩いてきた。

4) 動分詞 + உம் は ‘けれども’ という意を表す。

நான் இருந்தும் அவன் போனான்.

(私は 残っていたけれども 彼は 行った。)

[7] 関係分詞 (Relative Participles) பெயர் எச்சம்

1) 関係分詞は、名詞に先行して、名詞を修飾する。現在、過去、未来の3形がある。

現在と過去の形は、それに相当する時制の3人称単数中性形から最後の து をとった形、未来は、未来形の3人称単数中性と同形である。

〈例〉

3. sg. n.	関係分詞
அடைகிறது .....	அடைகிற (現在) 得ている…
அடைந்தது .....	அடைந்த (過去) 得た…
அடையும் .....	அடையும் (未来) 得るであろう…

\* 過去時制で இனேன் をとる弱語幹第3変化の過去関係分詞は、最後の ன を ய に変えることがある。

したがって、எழுதின または எழுதிய となる。

ஆ (ஆகு, ある) の過去関係分詞は、ஆன または ஆகிய となる。

〈例文〉

பெயன் பார்த்த அந்த நாய் (少年が見たその犬)  
 அங்கே போகிற ஆள் யார்? (そこへ行く男は誰か?)  
 இன்றைக்கு அரிசியை வாங்கின கடைக்காரன்  
 நாளைக்கு ஒரு மாட்டை வாங்குவான்.  
 (今日、米を買った店員は、明日 雄牛を買うだろう。)

கரையில் இருக்கிற ஒரு பெரிய மரத்தைக் காண்கிறேன்.

(土手に ある 1本の大きな 木を 私は見る。)

நான் நாளைக்குப் படிக்கும் புஸ்தகம் இது.

(私が 明日 読むであろう 本は これだ)

## 2) 關係分詞と結合する接尾詞

關係分詞は、時・方法・目的などを表す接尾辞と結合する。

- a) 一般に未来形の關係分詞 + **அள்வில்** ~するやいなや、  
**… விசாரிக்கும் அளவில், …** 質問するやいなや、…
- b) 關係分詞 + **இடத்தில்** ~の時、  
**… விசாரித்தவிடத்தில், …** 質問したとき、…
- c) 過去形の關係分詞 + **உடன்** (または **உடனே**) すぐに、~するや  
 いなや、…  
**… எழுப்பினவுடனே, …** めざまさせるやいなや、…
- d) 現在・過去形の關係分詞 + **படி, படியே, படிக்கு** ~のように、  
 ~に従って、  
**அவன் சொன்னபடி செய்வேன்.**  
 彼が言ったように私はやるだろう。
- e) 未来形の關係分詞 + **படி, படிக்கு, படியாய், படியாக**  
 ~のために、  
**பணம் கொடுக்கும்படிக்கு, …** 金を与えるために、
- f) 過去 (時として現在) の關係分詞 + **படியால்**  
 ~ので、~のゆえに、~だから、  
**… தூர தேசத்துக்குப் போகிற படியினாலே, …**  
 遠い 地方へ 行く ので
- g) 過去の關係分詞 + **பிரகாரம்** ~のように、~に従って、  
**நீ ஆக்கியாபித்த பிரகாரம், 汝が命じたように…**
- h) 過去の關係分詞 + **பின், பின்னே, பின்பு, பிறகு** etc.  
 ~のちに、  
**சில நாள் போனபின்பு, 2、3日すぎたのちに、…**

- i) 未来の関係分詞 + பொருட்டு ~のために、  
**தானியத்தைத் தின்னும்பொருட்டு, ...**  
 穀物を 食べる ために
- j) 過去・現在・未来の関係分詞 + போது, போழுது ~のときに、  
**வீதியை எட்டிப் பார்த்தபோது**  
 通りへ ついて 見た とき
- k) 過去・現在の関係分詞 + போதிலும் ~の時でさえ、~にもか  
 かわらず、~でさえも、  
**பல நாட்கள் ஆன போதிலும், ...**  
 2、3日 たった けれども、
- l) 過去の関係分詞 + மாத்திரத்தில் ~するやいなや、  
**பெட்டியைக் கொண்டுவந்த மாத்திரத்தில், ...**  
 箱を もって くるや 否や、
- m) 未来の関係分詞 + முன், முன்னே, முன்பு ~の前に、  
**வெள்ளம் வரும் முன்னே, ...**  
 洪水が 来る まえに、
- n) 関係分詞 + வரைக்கும், வரையில், மட்டும், } ~まで  
**மட்டுக்கும், அளவும், பரியந்தம் }**  
**அவன் இறந்துபோன வரைக்கும், ...**  
 彼が 死んで 去ってしまう まで、
- o) 過去・現在の関係分詞 + வரைக்கும் } ~する限り  
 過去の関係分詞 + **மட்டும் }**  
**தமிழ் பாஷை படித்தவரைக்கும், ...**  
 タミル 語を 研究した限りでは、

[8] 分詞状名詞

関係分詞は **அன், அள், து** などの人称語尾と結合し合成名詞となる。この形を分詞状名詞という。

この名詞は、動詞の行為の行為者を示し、語尾に応じた代名詞の変化に従う。関係分詞と語尾の間には **வ்** が挿入される。

(例) செய் னாசு

		(現在)		(過去)	
sg.	{	செய்கிறவன்	(為す男)	செய்தவன்	(為した男)
		செய்கிறவள்	(為す女)	செய்தவள்	(為した女)
		செய்கிறது	(為す物)	செய்தது	(為した物)
pl.	{	mf. செய்திறவர்	(為す者たち)	செய்தவர்	(為した者たち)
		செய்கிறவர்கள்	(為す者たち)	செய்தவர்கள்	(為した者たち)
		n. (செய்கிறவைகள் செய்கிறவை)	(為す物ども)	(செய்தவைகள் செய்தவை)	(為した物ども)

未来形は、現在形で **கிறேன்** をとる語根 + **ப்** } + 語尾 の形となる。  
 “ **க்கிறேன்** “ **ப்ப** }

(例) செய்பவன், படிப்பவன்

		(未来)	
sg.	{	செய்பவன்	(為すであろう男)
		செய்பவள்	(為すであろう女)
		செய்வது	(為すであろう物)
pl.	{	செய்பவர்	(為すであろう者たち)
		செய்பவர்கள்	(為すであろう者たち)
		(செய்பவைகள் சொப்பவை)	(為すであろう物ども)

(例文) வானத்தையும் பூமியும் படைத்தவர் யார்?

天と地とを創造した者は誰か?

(…வர் は複数形であるが単数のていねい語)

[9] 動名詞

タミル語は、数種の動詞がある。

- a) **-தல், -த்தல்** 型 (Nom. Dat. の型で用いられることが多い)

現在形が、**கிறேன்** となる動詞の語根 + **தல்**

現在形が、**க்கிறேன்** となる動詞の語根 + **த்தல்**

(まれに **க்குதல்**)

(例) செய் → செய்தல் なすこと

படி → படித்தல் (படிக்குதல்) 学ぶこと

- b) **-கை, -க்கை** 型

**கிறேன்** をとる語根 + **கை**

**க்கிறேன்** をとる語根 + **க்கை**

(例) போ → போகை 行くこと

நட → நடக்கை 歩くこと

\* Loc. の形の用法が多く、行為のおこる時を示す。

Inst. の形で、理由・原因を示す。

- c) **-ல்** 型

不定詞 + **ல்**

(例) செய் — செய்ய — செய்யல் なすこと

வா — வர — வரல் 来ること

கேள் — கேட்க — கேட்கல் 聞くこと

- d) **-ப்பு, வு** 型 (この型は他の語を支配せず、純粹の名詞として用いられる)

**கிறேன்** をとる語根 — + **வு**

**க்கிறேன்** をとる語根 — + **ப்பு**

(例) அறி → அறிவு 知ること

படி → படிப்பு 学ぶこと

- e) **து** 型

この型は、[8] の分詞状名詞の中性・単数と同型であり、過去・現在・未来の時制がある。

**அறிகிறது** 知ること

**அறிந்தது** 知ったこと

**அறிவது** 知るであろうこと

\* この型は、分詞状名詞か動名詞かの区別が明瞭でない。

## II. 動詞の否定形

### (1) 単純否定形 動詞語根 + 人称語尾 (連声の規則適用)

全時制に言及するがふつうは習慣的な現在時制として用いられる。

(例) படி (学ぶ), நட (歩く)

		sg.	pl.	
1	படியேன் நடவேன்	படியோம்	நடவோம்	
2	படியாய் நடவாய்	படியீர்	நடவீர்	
		படியீர்கள்	நடவீர்கள்	
3 m.	படியான் நடவான்	m.f. {	படியார்	நடவார்
f.	படியாள் நடவாள்		படியார்கள்	நடவர்கள்
n.	படியாது நடவாது	n.	படியா	நடவா

〈注〉 அறியேன் と மாட்டேன் を除き、この否定形は、3. sg. n. 以外はあまり用いられない。

(例文)

**அதைக் குறித்து நான் ஒன்றும் அறியேன்.**

それについて 私は 1つも 知らない。

### (2) 否定形現在

分詞状名詞 (現在・中性・単数・主格) து + இல்லை

(例文) நான் படிக்கிறதில்லை. 私は学ばない。

(= படிக்கிறது இல்லை)

\* து 型動名詞の過去・未来の n. sg. も時々 இல்லை と共に

用いられ否定の過去・未来を作る。

(例文) நான் செய்தது இல்லை. 私はしなかった。

(3) 否定形過去

不定詞 + **இல்லை**

(例文) **நான் படிக்கவில்லை.** 私は学ばなかった。

(4) 否定形未来

不定詞 + **மாட்டு** (できる、~であろう) + 人称語尾

(例文) **நான் படிக்கமாட்டேன்.** 私は学ばないだろう。

(5) 命令形の否定

単純否定の 3 sg. n. の **து** を **தே** にかえる。

ていねいな形は **உம்** を加え、複数形は **உங்கள்** を加える。

(例文) **படியாது** (それは学ばない) → **படியாதே** 学ばな  
**படியாதேயும், படியாதேயுங்கள்.**

(6) 動分詞の否定 (2つの作り方がある)

(i) 語根 + **ஆமல்** **படியாமல்**

(ii) 語根 + **ஆது** **படியாது** (3. sg. n. 否定形と同型)

(7) 関係分詞の否定

単純否定 3. sg. n. の **உ** を **அ** にかえる。

**படியாது** → **படியாத**

{	学ばなかったところの 学ばぬところの 学ばないであろうところの	}	3 時制に言及
---	---------------------------------------	---	---------

(例文) **அடியாத மாடு படியாது.**

打たれぬ雄牛は従わない。

\* 最終の **த** は時々略される。 < **அடியா**

(8) 否定の分詞名詞

否定の關係分詞 + 人称語尾 (3 時制に言及)

(例) **செய்யாதவன்**

なさぬ者 なさなかった者 なさぬであろう者

## (9) 否定の動名詞

否定形の 3. sg. n. の **து** を **மை** にかえる。

**படியாது** → **படியாமை** 学ばぬこと

\* 否定の動詞 + **இரு** は完全な否定形を作る。

**பேசாமல் இருக்கிறேன்** } 私はしゃべらない。  
**பேசாதிருக்கிறேன்** }

## III. 受動態、再帰動詞、使役法

## (1) 受動態

- a) タミル語に受動態はないが、不定詞 + **படு** の形で受動の意味が示される。

**அடிக்கப் படுகிறேன்.** 私は打たれる。

**பணம் கொடுக்கப் பட்டது.** 金が与えられる。

- b) 経験されることを表現する名詞は慣用的に **படு** と結びつく。

**துக்கம் + பட்டான்** > **துக்கப் பட்டான்** 彼は悲しんだ。

**அடி பட்டான்** 彼は打撃を経験した = 彼は打たれた。

- c) **உண்** (**உண்ணு**、食べる)、**உறு** (感ずる) も経験する意を表し、動詞語根または名詞と結合して受動の意味となる。

**அடியுண்டான்.** 彼は打撃を経験した。 = 彼は打たれた。

**பயமுற்றேன்.** 私は怖れを経験した。 = 私は怖れた。

## (2) 再帰動詞

- a) 再帰の意味は、動分詞 + **கொள்** の形で表される。

**அவனைப் பார்த்துக்கொள்ளச் சொன்னேன்.**

彼自身を見るように (= 自覚するように) と私は言った。

- b) 動分詞 + **கொள்** は連続する行為をも表す。

**இப்படியே சோல்லி, வழக்கு அடிக்கொண்டார்கள்.**

このように 言って 道で 彼らは けんかを続けた。

- c) **கொள்** は単なる虚辞としても用いられる。

(3) 使役法

- a) 一般的に使役動詞は次のように作られる。

**கிறேன்** をとる語根 + **வி**

**க்கிறேன்** をとる語根 + **ப்பி**

使役動詞は、強語幹第 6 変化に属する。

(例) செய் なす。 செய்வி なさせる。

செய்விக்கிறேன் 私はさせる。

செய்வித்தேன் 私はさせた。

செய்விப்பேன் 私はさせるだろう。

- b) **கிறேன்** をとる若干の動詞は、**பி** を加える。

(例) காண், காண்பி みせしめる = 示す。

கல் 学ぶ。 கற்பி 学ばしめる = 教える。

- c) 若干の語根は **த்து** を加えて使役法を作る。(弱語幹第 3 変化)

**படு** → **படுத்து**

- d) 変化して使役法を作る動詞もある。

ஓடு (歩く) → ஓட்டு (歩かせる)

திரும்பு (もどる) → திருப்பு (もどらせる)

(例文) இராயர் அம்பட்டீன அழைப்பித்தார்.

王さまは 床屋を 呼ばせた。

IV. 助動詞

- a) 必要を示す助動詞 **வேண்டு**

**வேண்டும்** (会話体 **வேணும்**)

否定形 **வேண்டாம்** (会話体 **வேணாம்**)

関係分詞 **வேண்டிய**

分詞状名詞 **வேண்டியது**

〈例文〉 பத்து ரூபாய் உமக்கு வேண்டுமா?

10 ルピーが 君にとって 必要か。

அந்த பெட்டி எனக்கு வேண்டாம்.

その 箱は 私にとって 必要ない。

\* 必要なものが Nom. 必要とする人が Dat. で示される。

不定詞 + வேண்டும் = ~せねばならぬ。

    + வேண்டாம் = ~してはならぬ。

படிக்க வேண்டும் = 学ばねばならぬ。

போக வேண்டாம் = 行ってはならぬ。

எனக்கு வரவேண்டிய பணம்

= 私に入ってくるべき金。

நான் செய்யவேண்டியதைச் செய்வேன்

= 私はなすべきことをなすだろう。

b) 動詞 கூடு (結びつく) は、助動詞として用いられ、可能・不可能・適合・不適合・禁止・随伴などを表現する。

1) கூடும் (可能、適合)

அது அவனால் கூடுமா?                      கூடும். (Inst. +)

それは 彼によって なされうるか                      できる。

இது இந்தக் காரியத்துக்கும்                      கூடும். (Dat. +)

これは この                      目的に                      適合している。

2) கூடாது (கூடும் の否定)

அது அவனால் கூடாது.

(それは彼によってなされえない)

இது காரியத்திக்குக் கூடாது.

(これは目的に適合しない)

3) கூடாதே = 強い禁止の命令

அம்மரத்தை நீ வேட்டக்\* கூடாதே.

その木を 汝は 切っては ならぬ。

\* வெட்டு = cut.

4) 關係分詞 கூடிய (可能、適合) கூடாது (不可能、不適合)

5) 不定詞 கூட (変化語幹 + கூட = ~と共に)

என் கூட வா. (私と一緒に来い。)

6) கூடாமை (不可能) “否定の名詞形”

மதுரைக்குப் போகக் கூடாமையினால், ...  
マドuraiへ 行くことができないことによって、

c) 動詞 மாட்டு (しかる) は、多く否定形として“できない”の意を表す助動詞の働きをする。

மாட்டேன். 私はできない。

\* 否定形の関係分詞 மாட்டாத

படிக்கமாட்டாத பையன் அவனா?

勉強したくない少年は彼か?

\* 否定形の動分詞 மாட்டாமல், மாட்டாது.

d) 動詞 ஆகு は、“ふさわしい”を意味する助動詞として使われる。

3 sg. n. の未来形 ஆகும் は ஆம் と短縮され、-ல் 終動名詞について許可を表す。

நீய்கள் பொகலாம். あなたは行ってよい。

அப்படிச் செய்யலாம். そのようにしてよい。

\* 否定形 ஆகாது

\* -ஆம் の疑問に対する禁止の返答としてしばしば கூடாது が使われる。

நான் இப்படிச் செய்யலாமா?

私はこのようにしてもよいか。

செய்யக்கூடாது. してはならない。

e) 動詞 தகு (ふさわしい) は、不定詞について助動詞の働きをする。

不定詞+ தகும் (~すべきである)

不定詞+ தகாது (~すべきでない)

புருஷன் தன் மனைவியை அடிக்கத் தகாது.

男は 自分の 妻を 打つ べきでない。

- f) 不定詞の終字 -a に代えて **அட்டும்** をつけると許可を表す。会話体の用法であり、全ての数、人称に通用する。

**அவன் வரட்டும்.** 彼に来させよ。

## V. 条件法と願望法

### A. 条件法

- a) 条件文は、1 人称単数過去形の **ஏன்** を **ஆல்** にかえて作る。

“～ならば”

**படித்தேன்** → **படித்தால்**

**வந்தேன்** → **வந்தால்**

〈例文〉

**நீர் கூப்பிட்டால்\***, வருவார்கள்.

あなたが 呼ぶならば、彼らは来るだろう。

\* **கூப்பிடு** = to call

- b) **ஆல்** にしばしば **போல** がつく。

**சத்தம்** (sabda) **கேட்டால்போல**, **அவன் கதவைத்**

音を 聞いたかのように 彼は ドア-を

**திற** (= u ppen) **ந்து பார்த்தான்.**

開けて 見た。

- c) 会話では使われない、別の形の条件文がある。

**திறேன்** をとる語根 + **இல் செய்யில்**

**க்கிறேன்** をとる語根 + **க்கில் படிக்கில்**

**அவன் புத்தியாய் நடக்கில், அவனுடைய**

彼が 理性的に 振舞うならば 彼の

**காரியஞ் சித்திக்கும்.**

仕事は 成功するだろう。 vsidh

- d) “～でなければ” という否定形の条件文は次のように作られる。

(i) 否定の動分詞 + **விட்டால்** (この形のとて、否定の動分詞の末尾の **மல்** はしばしば略される。)

செய்யாமல் விட்டால்

செய்யா விட்டால்

அவன் வந்தால், அவனோடு பேசுவேன் ;

彼が くるならば 彼と一緒に 私は語るだろう。

வரா/விட்டால்,

こなければ

அவனுக்கு உதவி(= help.)செய்ய/மாட்டேன்.

彼に 助力できない。

\* இல்லை の 動分詞 இல்லாமல் に対する இல்லா 是、“もし ~なければ”、あるいは“さもなければ” の意で用いられる。

அவன் வந்தால், அவனோடு பேசுவேன் ;

இல்லாவிட்டால், அலனுக்கு உதவிசெய்யமாட்டேன்.

彼がくれば彼とともに語るだろう。さもなければ、彼に助力しないであろう。

(ii) 否定の動分詞 + இருந்தால்

அந்தப் பாடத்தைப் படியாமல் இருந்தால்,

その 学課を 学ばないのならば

அது உனக்கு எப்படித் தெரியும்?

それを あなたは どのように 知るのか。

e) 条件法の ஆல் + உம் 是、~にもかかわらず、たとえ~であつても の 意味となる。

நான் சொன்னாலும், அவன் செய்வானா?

私がたとえ言ったとしても、彼は するであろうか。

## B. 願望法

a) 願望法はふつう、不定詞 + கடவேன் の形で表される。

b) 動詞の第 1 人称、または第 2 人称未来形 + ஆக

3 人称中性の願望は、து 終の分詞状名詞 + ஆக

உம்முடைய ராஜ்யம் வருலதாக!

汝の王国が来らんことを!

- c) 語根 + க் also 願望法を作る。

வாழ்க, அரசனே! 栄えあれ、王よ!

(வாழ்) 生きる。繁栄する。

- d) 否定の願望法は否定の動分詞 + இரு of 願望法の形をとる。

நீர் விழாதிருப்பீராக! あなたが失敗しませんように!

(விழ்) 失敗する

## 6. என்று の用法

என்று は話し手の言葉をうけたり、名詞節を導いたりして、英語の that、梵語の iti、日本語の “～と、～とって”、などの働きをする。

அவன் அங்கே இருக்கிறான் என்று

彼が そこに いる ことを

எனக்குத் தெரியும்.

私は 知っている。

வருவேன் என்று சொன்னான்.

「私は来るだろう」と彼は言った。 私 = 彼

வருவான் என்று சொன்னான்.

「彼はくるだろう」と 彼は言った。 話し手の彼 ≠ 話中の彼

\* என்று は擬声語をうける。

பட · படவென்று வேலை செய்கிறான்.

パタパタと 仕事を 彼はする。

## 7. 時制の用法

- a) 現在 現在の行為を示す。また未来の行為に言及することもある。しばしば習慣を示す。
- b) 未来 未来の行為を示す。習慣を表すこともある。

c) 完了形

現在完了	動分詞 + இரு	の現在形	படித்திருக்கிறேன்
過去完了	動分詞 + இரு	の過去形	படித்திருந்தேன்
未来完了	動分詞 + இரு	の未来形	படித்திருப்பேன்